

校本芭蕉全集

第九卷

評傳・年譜
芭蕉遺語集

小宮豐隆監修

井本農一・久富哲雄
荻野清・今榮藏・赤羽學 著

校本芭蕉全集

第九卷

評傳・年譜
芭蕉遺語集

角川書店

校本 芭蕉全集
第 九 卷



昭和四十二年五月十五日 初版發行

定價 一一〇〇圓

著 者

井本農一・久富哲雄
萩野清・今榮藏
赤羽學

發行者

角 川 源 義

印刷者

中 内 あ き 子

製本者

鈴 木 俊 一

發行所

株式會社 角 川 書 店

東京都千代田區富士見二ノ十三
振替口座東京一九五二〇八番
電話東京(265)七二二一(代表)

Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

芭蕉評伝

井本 農 一 九

- はじめに 出生・故郷 家・父母・兄弟
妹 出仕と俳諧入門 仕官中の俳諧
致仕 致仕後 『貝おほひ』を著す
江戸出府 『貝おほひ』の出版 当時の
江戸俳壇と芭蕉 談林修行 帰郷 俳
諧師の道 俳諧宗匠となる 俳壇的地位
の確立 新たな転回 深川転居 隠者
への模索 甲州流寓と芭蕉庵再建 失意
と自恃——野ざらし紀行 『野ざらし紀行』
の旅を了えて 風雅への献身 蕉門の安
定 『笈の小文』の旅へ 『おくのほそ
道』旅行の目的 旅の事実と『おくのほそ
道』 不易流行説の着想 旅のあと
故郷へ 幻住庵 嵯峨日記と猿蓑 江

戸の生活　最後の旅へ　おわりに

付　芭蕉伝記研究書目

久　富　哲　雄　一三

芭蕉年譜

荻　野　榮　清　一四
今　藏　一四

芭蕉遺語集（俳論篇補遺）

赤　羽　學　校　注　一五

概　説

一六

凡　例

一七

一　「草堂建立之序」抄

一八

二　「石川丈山翁の六物になぞらへて芭蕉庵六物の

記」抄

一九

三　他郷即吾郷（『句餞別』）

二〇

四　簑虫庵庵号の由来 他（『庵日記』）

二一

五　『聞書七日草』抄

二二

六　都の涼み過て（『花摘』）

二三

七　「月山発句合」序抄

二四

八	『猿蓑』序抄	二八三
九	『西の雲』序抄	二八三
一〇	『雑談集』抄	二八三
二	『己が光』序抄	二八七
三	『芭蕉庵三日月日記』序	二八八
三	『流川集』序抄	二八九
四	『炭俵』序抄	二九〇
五	『別座鋪』序抄・贈芭叟二錢別弁	二九一
六	『句兄弟』の判語	二九三
七	『芭蕉翁追善之日記』抄	二九三
八	『笈日記』抄	三〇七
九	藥時宛杉風書簡	三〇
一〇	去来本『おくのほそ道』後記抄	三三三
二	『芭蕉翁行状記』抄	三三四
三	『木がらし』序抄	三三九
三	東藤子讀を乞う（『敝宮物語』）	三三〇
四	俳諧に古人なし他（『初蟬』）	三三〇
五	名所に雑の句ありたき事（『桃菫集』）	三三二

三六	一所不住の形見（『芭蕉庵小文庫』）	三三三
三七	『菊の香』序抄・「贈其角先生二書」抄	三三三
三八	惟然子が頭の病い（『鳥の道』）	三五
三九	山家集を慕う他（『陸奥衛』）	三五
四〇	「無名庵月並吟会式」抄	三六
四一	『俳諧問答』抄	三六
四二	『篇突』抄	三七
四三	『梟日記』抄	三八
四四	無風雅第一の人（『続五論』）	三五〇
四五	発句して心見せよ他（『俳諧猿舞師』）	三五〇
四六	名月の二吟（『続猿蓑』）	三五二
四七	『続有磯海』序抄	三五三
四八	『旅寝論』抄	三五三
四九	翁の歎美したまひし狂歌他（『俳諧曾我』）	三五四
五〇	俳諧は三尺の童にさせよ他（『けふの昔』）	三五四
五一	『雪の葉』序抄	三五六
五二	『一幅半』序抄	三五六
五三	廁上の活法（『三上吟』）	三六七

- 四 きりぎりすの鳴き弱わりたる 他〔『俳諧草庵集』〕 三六
- 四 桐の葉の一葉とへ〔『杜撰集』〕 三六
- 四 無名庵の寢覚〔『射水川』〕 三六
- 四 翁の示し三条〔『其木がらし』〕 三六
- 四 俳諧はあからさまなるがよし〔『柿表紙』〕 三六
- 四 其角が俳諧はつきぬべし 他〔『東西夜話』〕 三七〇
- 四 我が手筋〔『渡鳥集』〕 三七二
- 五 付肌はさるものにて〔『三河小町』〕 三七二
- 五 「厚為宛杉風書簡」抄 三七三
- 五 牧童はよき者 他〔『草刈笛』〕 三七三
- 五 野山をかけめぐる心地〔『霜の光』〕 三七四
- 五 談合の相手なくては〔『夜話くるひ』〕 三七四
- 五 昆若ずき〔『麻生』〕 三七五
- 五 直江津聴信寺の一事 他〔『藁人形』〕 三七五
- 五 岱水との両吟〔『木曾の谿』〕 三七六
- 五 『風俗文選』抄 三七六
- 六 『俳諧雅集』序抄 三八〇
- 六 『千鳥掛』序抄 他 三八〇

空	こなしすべし（『正風彦根体』）	三八一
空	『許野消息』抄	三八一
空	『歴代滑稽伝』抄	三八三
空	剃髪時の吟（『みかへり松』）	三八五
空	『枕草子』を試みんと思はば（『それぞれ草』）	三八五
空	『俳諧十論』抄	三八五
空	作を捨て作を好む（『桃の杖』）	三八七
空	『葛飾』序抄	三八七
空	『三画一軸』跋抄	三八八
七	宗因は此道の大功（『芭蕉園』）	三八九
七	心は無情狂狷の間にも有り（『水の友』）	三八九
七	点者の戒め（『石舎利集』）	三九〇
七	千那の句評二題（『鎌倉海道』）	三九〇
七	『十論為弁抄』抄	三九一
七	死して亡せざる者は命長し（『放生日』）	三九三
七	絶景物に心の奪はる所（『養虫庵集』）	三九三
七	品川を踏み出したらば（『或問珍』）	三九三
七	其角の作を許す他（『鉢袋』）	三九四

八〇 智周の句評・誹諧袖（『智周発句集』）

三九四

八一 秘事はなし他（『誹諧耳底記』）

三九五

八二 付合の書を止む（『くせ物語』）

三九六

八三 『曠野』の付合を悔む（『はせを翁七部搜』）

三九六

八四 夏座敷を題に定む（『許六拾遺』）

三九七

八五 『杉風句集』序抄

三九八

八六 杉風の耳のうときを哀れむ（『俳懺悔』）

三九八

八七 『霜の葉』序抄

三九八

補注

三九八

書翰篇補遺

今 榮藏校注

四〇一

凡例

四〇二

一五 酒堂宛（元禄三年四月十六日付）

四〇三

一五 曲水宛（元禄三年六月三十日付）

四〇四

一五 去来宛（元禄三年七月筆）

四〇八

一五 高橋喜兵衛（怒誰）宛（元禄三年七月廿四日付）

四一〇

一六 句空（推定）宛（元禄四年正月三日付）

四一二

一六 正秀宛（元禄五年三月廿一日付）

四一三

一三 去来（推定）宛（元禄五年九月八日付）

四二四

一三 曲翠宛（元禄七年正月廿九日付）

四六

一四 智月宛（元禄七年八月十四日付）

四八

一五 又七（乙州）宛（年次不詳）

四〇

芭蕉受信書簡集補遺

四三

一七 越人書簡（貞享四年十一月廿二日付）

四二

芭蕉評伝

井
本
農
一

はじめに

『おくのほそ道』のなかに次のような一節がある。

越前の境、吉崎の入江を舟に棹さして汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐越の松 西行

此一首にて数景尽きたり。もし一弁いちべんを加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。

加賀の国と越前の国との境にある、吉崎の入海を舟で渡って、汐越の松を見に行ったときの記事である。ここで芭蕉は有名な汐越の松について一言の描写も加えない。ただ西行の和歌を記すのみである。しかも、これ以上一言一句付け加えるなら、それは五本の指の脇に更に一本指を加えるようなことだといふ。

なぜ芭蕉はそんなに極言するのであろう。この歌は実は西行の歌ではない。蓮如上人れんにょの作だといわれる。しかも、誰が見てもこの歌は、それ程すぐれた歌とは思われない。それなのに芭蕉は敢て「もし一弁を加ふるものは無用の指を立つるがごとし」と断定する。それは芭蕉が西行に深く傾倒していたからである。いや傾倒などというなまぬるい言葉は不適当だ。西行を信仰していたからだ。絶対随順である。だから作の巧拙は問わない。批判しようとはしない。全面降伏である。没我的に受容する。そこに自分

を埋没させるのである。本来伝統の受容とはそういうものであろう。うまいところだけ摘まみ食いをして、ようとして、伝統の受容ができるはずはない。古人も自己の全能力と人生を賭けている。それをうまそうなところだけ、ちょっと摘まみ食いをして、古典の享受ができるはずのものではない。

しかし、芭蕉も始めから西行に全面降伏していたわけではない。というより、むしろ、西行とは正反對のところから出発した。もっとも、西行だって、若かりし日には、晩年の西行とは正反對のところにいたかもしれない。川田順氏にいわせれば、若かりし日西行はレディス・マンだったという（同氏著『西行』）。それはともかく、「うかれける人やつ瀬の山桜」とよみ、「われもむかしは衆道ずきの……」（『貝おほひ』）という頃の芭蕉が、中年・晩年の西行と正反對のところにいたことは確かである。その芭蕉が、いつ、どうして全面転回をしたのだらう。いつ頃から西行への思慕が始まったのであろうか。

もっとも、芭蕉の思慕する西行が、実際の西行と同じであったかどうかは疑問である。芭蕉は自己の理想の投影を西行に見、理想像としての西行に全面降伏したものに相違ない。

若くして妻子を離別し、進んで世俗を去った西行、「願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」と詠んで花月に生涯を託した西行、「風の音に物おもふわれか色染めて身に染みわたる秋の夕暮」と孤独に生きた西行、芭蕉はそういう文人として西行を理會し、そこに自己の同行者を認めたものであろう。芭蕉に「自然」と大書した真蹟がある。その下の注記に「注曰、従天謂道、従道謂自然矣」とある。その自然は、人間を自然内存在と認める意味での自然であらう。人間と対立する自然の意ではない。人間も亦自然的存在なのである。ということとはまた逆にいえば、天地万物・雪月花も、人間

と同類同質だということになる。芭蕉は、西行も亦自然をそう見る人と考えた。「ここをまた我住み憂くて浮かれなば松はひとりにならんとすらむ」と詠む西行を、芭蕉は自分の志す道を先に歩んだ先輩として見た。そうして「終宵嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松」に、「一弁」を付け加えるなど断言したのである。だが、もう一度くり返せば、いつから、どうして、芭蕉はそんな全面転回をしたのであろうか。

滔々として社会の近世化が進み、経済が伸張して町人の擡頭が著しい時、今更隱遁者西行に自己の理想の投影を見るとは、時代に対する逆行ではないか。激しく流れて行く新しい時代の近世的潮流に対して、それは中世的姿勢を取るように見える。しかし、もちろん芭蕉も時代の子であるに相違ない。詩人であってみれば、むしろ最も敏感に時代の動きを感受したはずである。それにもかかわらず反時代的な相を示すのは、すべて優れた作家は何等かの意味で時代を超えたところがあるからであろう。芭蕉に近世的な特色を指摘することは容易である。だが、それは当然過ぎて何の意味もない。また逆に、芭蕉に中世的性格があることを言うのも、それだけでは大した意味があらうとも思われない。それよりも、芭蕉がいかにして時代を超えているかを明らかにすることが、芭蕉を真に理會することではあるまいか。芭蕉といえども、初めから時代を超えていたはずがない。青年期においては同時代的である。同時代的な姿勢から反時代的な姿勢に移って行く過程の中に、芭蕉の最も個性的なものが顕れていると見ることはできないか。もしそうだとすれば、それはいつ頃、どうして起こったか。

史馬遷は『史記』の「太子公自序」に次のようにいう。「詩三百、大抵聖賢の発憤して作る所なり。

此れ人は皆、意に鬱結する所ありて、其の道を通ずるを得ず。故に往事を述べ、来者を思ひしなり」と。芭蕉において「意に鬱結する所」とは何であつたか。

といつて、私がここに課せられた所は、私の芭蕉論ではない。評伝である。まずできる限り客観的に芭蕉の生涯を要約して述べることに努めなければなるまい。紙数は限られている。解っている事実を述べるだけで精一杯であらう。

出生・故郷

芭蕉が生まれたのはどこか。伊賀国（今の三重県）上野であるというのが通説であるが、そこから四里余（十五キロ）東北へ入った柘植であるという説も有力である。

元来芭蕉の父親松尾与左衛門は、柘植に居た。竹人の『芭蕉翁全伝』（芭蕉の直門服部土芳門の竹人が師説を受けて宝暦十二年（一七六二）成稿したもの）に「弥平兵衛宗清の裔孫にして、伊賀国柘植の郷、日置、山川の一族松尾氏也」とあつて、松尾家の家系略図を載せているが、『蕉翁礼讃と誕生地考』（松尾早次著）によれば、柘植に松尾氏が入つたのは戦国時代末期で、爾後江戸時代を通じ、松尾六家があつたという。今日も、同地には松尾氏を名乗るものが少なくない。なお、江戸時代には、松尾六家は「無足人級で、姓の名乗は許され、定紋は、円に劔花菱である」（同書）とあり、無足人制については「この制度は、藤堂藩独特の制度で、禄は与へず、その代りに、人足に出ることを免じた。即足無しにして、絶え